

「不条理ショートストーリー」第1巻

# 「時空の隙間 KARA」

不条理世界における超量子論的観察日記

やぼねしあ興房

## 収録“論稿”一覧

第 1 話：「喫煙に関する反宇宙論的現象論」

第 2 話：「善意基盤社会の弊害克服に関する予備的考察」

第 3 話：「“幸福幹細胞”における背理的機能の検証」

第 4 話：「食文化における動物愛護精神の発展的展開と葛藤事例の研究」

第 5 話：「世界同時秩序破壊による食糧危機を回避する方法の研究序説」

第 6 話：「宇宙の本質究明に向けた庶民皮膚感覚的試論」

第 7 話：「無ストレス社会への絶望的渴望による情況展望」

第 8 話：「時間の心理的感覚に関する答えのないクイズ」

第 9 話：「グレートジャーニー後予測のための局地的観察録（抜粋）〈人は何処を目指すのか〉」

第 10 話：「疫学的生活因果律による政治風日常絵巻図（部分）」

## 「喫煙に関する反宇宙論的現象論」

男は叫んだ。

「国民総禁煙法は憲法違反だ！ 個人の基本的人権を侵害している」

「国会の多数決で決まったことです。喫煙による健康被害は医学的に証明されています。また、煙草による疾病が増えて医療費が膨らみ、国家財政が危機に瀕しているのです。基本的人権どころではありません。選択の余地はないのです」

「税金だって人より多く払ってきたじゃないか」

「病気が増えて医療費負担が増えた上に、働ける人が減って税収が減ったんです。あなたの税金では足りません」

「私は認めない！ 自分のことは自分で決める。おれは吸うぞ！」

「わがままは許されません。あなたを逮捕します」

男は連れ去られた。

\*\*\*\*\*

「明日は山狩りだそうだ」

「俺たちもかり出されるのか？」

「それはそうだろう。なんせ、最後の一人だからね。絶対に逃がすわけにはいかんのだ」

「いよいよ喫煙人絶滅か」

「どこにかくれているか、わかってんのか」

「一番深い谷しか残っていないんだからそこしかない。あしたは総攻撃だ。国防軍も出動する」

次の日、谷を取り囲む稜線には森の木の数よりも多い軍隊と警察隊、自衛団が集まり、空には数機のヘリの轟音が空を振るわせていた。

「いたぞ！ 無人機のカメラに人影が写った」

「北東斜面からガス中隊を突入させよう」

「紫煙防護マスクを全員につけさせるのを忘れるな」

「あなた！ あなた！ もう諦めて出て来てください。秘密のタバコ畑も潰されました。もう何をしても無駄です。お母さんも麓で待っています。お腹の子供も泣いています」

「あなたは出てきても捕まりません。人間研究国宝として年金が支給されるそうです。ハローワークに通わなくてもいいんですよ」

\*\*\*\*\*

騒々しさが極限に達したと思われたとき、一瞬にして世界の音も色も、装飾のすべてが消えた。

男は、記憶と思考を失った。そしてただ立っていた。

男が銅像になりかけたとき、膝の前を何かが横切った。いや、何かと言っても気配だけの何かだ。しかし、男は確かに感じたのだ。何も見なかった目はその気配を捉えた。気配が無数に飛び交い、目はただ真っ白い世界の中にそれを感じていた。ニュートリノか、と男は直感したが、それはむしろ反ニュートリノというべきものであったろう。

目を大きく見開き、頭蓋骨がぶっとふくらむくらいの力を込めてまばたきしたとき、ぱっと視界が開け、世界の色と音が戻った。

目の前に現れたのは一瞬のどかな田園風景かと思われた。最初に目に飛び込んできたのは世界で一番大きいと教わった熱帯系の花びら。その真ん中にヨークシャー種の牛が立っており、乳房から伸びたホースはまっすぐ上空に立ち上がり、牛乳がその中を上っていくのが見える。乳は上に行くにつれて微粒子化し、やがてホースも乳も見えなくなってしまった。

見渡すと、色とりどりの大きな花があちこちに咲いており、その上に馬や熊、鹿、ライオン、虎がじっとしている。さらに目を凝らすと形と大きさが異なった大小の花びらが辺り一面に敷き詰められ、その一つ一つに猫や犬、ネズミ、アルマジロ、ゴキブリ、ハチ、てんとう虫、ミミズ、ダンゴムシ、ダニなどがたたずんでいる。

男は、自分のまわりにも何かがあることに気がついた。ホースが頭についている。体のまわりには透き通った真綿のようなものがロートをひっくり返した形で上に伸びている。男は息を吸った。思い切り吸った。頭がボーッとになって何もわからなくなってしまった。

風が吹いていた。確かに風が頬をなせたのだ。男はおもむろに目を開けた。

無数の反ニュートリノが無数に飛び交っていた。ここはどこなのだ——男は思い出した。宇宙が始まる時、エネルギーの揺らぎから世界ができた。無からできた宇宙、それがこれまで育ってきた世界だ。では、見たことがなかったこの世界は反粒子の世界か。

突然、雷鳴が轟き、大きな光が走った。光は粒子である。いや、この光は反光子と呼ぶべきか否か。そんなことを考えるまもなく、光のチューブの中を裸の子供があっというまに巻き上げられて消えた。すると男の体がふっと浮いたかと思うと、光のシャワーに持ち上げられて放り投げ出された。

あの世界はなんだったのか。男にはわからなかった。しかし、さっきあの裸の男の子が走り去るのはしっかりと目に焼き付いていた。あの子はあの世界から追放されたのだ。

あの世界は物が動くことによる心や物の摩擦をなくしている。動きを止めることによっ

て平和を得たのだろう。そして、先祖帰りなどで動くものが現れたら、反宇宙の意思として排除するのだ。

あの子は花びらの茎を伝って降り、小さい花びらを蹴散らしながら走り回っていた。男の記憶にその場面だけが浮かんだ。その小さい花びらからは無数の赤い微粒子が吹き出し、超スピードで天上に吸い込まれた。天はその子を吸い上げようとして、同じく排除すべき存在、すなわち男を発見したのであろう。

\*\*\*\*\*

「国民総禁煙法は憲法に優先する」——内閣法制局長官がつぶやくように発言した。  
「聞こえないぞ！」——野党議員の声のようだ。

議長が小さな声で言った——「憲法の効力を停止し、喫煙禁止取締法案他関連 100 法案を一括して採択します」

与党議員が合図とともに起立し、そして議場から逃げ去った。野党議員はあっけにとられ、ただ茫然と立っていた。その時には国会議事堂は国防軍に取り囲まれていた。

それから始まった喫煙者狩りはすさまじいものだった。隣近所で煙がたなびくとどこからともなく禁煙兵が現れた。密告も後をたたなくなり、地域社会の絆は崩壊した。

政府内部の政権抗争にも利用された。そのあげく、政治家のほとんどは粛清され、合法的に軍事政府ができあがった。

\*\*\*\*\*

男は山中深い洞窟にいた。天井から滴る水滴を避けながら奥深く進むと、そこにいたのは貧乏神のような老人だった。見ると煙草をおいしそうにぷかぷか吸っている。その横には「ノンニコタル」と書いた煙草の箱のようなものがあった。

男は思わず「私にも吸わせてください」と叫んだ。老人はチラッと目ん玉を男の方に回転させたが、それもほんの一瞬だけだった。

「タバコをください！」「タバコを」「タバコを」「タバコ」「タバコ！」「タバコォオ～!!!」  
老人の耳元で叫んだ。

「お前は・タバコが・吸いたい・のかね」

昔のコンピューター合成音のような声で老人は言った。

「どれでも・吸うが・いい」

「ただし・どうなっても・知らない・ぞ」

男はかまわず煙草の箱を開け、老人の前のランプのほやを上げて火を付けた。

「うまい！」「生きててよかった」「幸せだ～」「サイコー」「うめえ～」

忙しく吸いながら、吸うたびに歓喜の声を上げる。

「わしの話を・聞いてから・吸えば・いいもの・を」

「その・タバコは・わしが発明・したものじゃ。一箱を・除いてな。昔は・愛煙家が多くて・税金も多かった。じゃが・健康被害が増え・労働者が減った。医療費が増え、税金が減った・ということじゃ。そこで政府は、わしに健康にいい煙草を作れと言った。発明したのがこれじゃ。ニコチンもタールも出ないが、脳をある仕組みで刺激すれば煙草を吸ったと脳が勘違いし、満足する。これでうまくいくはずじゃった」

いつのまにか老人の声は合成音ではなく、しわがれ声になっていた。

「脳が勘違いさえすれば何で煙草を作ってもいいのだが、煙草栽培農家は困る。他にも妨害者はいたが、そのうちまがい物が出てきた。同じ仕組みを使って脳をコントロールしようという者が現れた」

「そして、ついに事故が起きたのじゃ。タバコを吸うと脳が溶けた」

「大統領派は脳をコントロールしようとしたのだが、首相派は煙草を禁止しようとした。健康被害なんか関係ない。政争の具に使われたのじゃ」

言い終わったとき、男は倒れていた。脳が溶融する煙草を吸ったのだ。老人は紛れ込んだ1箱を男のおかげで選び出すことができた。

洞窟の前の空を爆撃機が飛んだ。森を押し倒す音がだんだん近くなった。

「さてそろそろだな」

老人はやおら立ち上がった。その声は覇気のある若者の声だった。

老人、いやいまや若者は、残りの煙草をかき集めて機械にかけた。一瞬、ある気配が超高速で飛び交った。それは数千兆個、いやそれどころではなく、空間を隙間なく埋め尽くすほどとんでもない数のニュートリノであったろう。

煙草は無数の青い微粒子になり、森の中を進軍してきた兵士たちを抱き込んだ。空も青く染まり、爆撃機もヘリコプターのエンジン音も消えた。

兵士は体がだるくなった。乗っていた戦車は瞬時に花びらに変わっていた。兵士はやがてゆっくり立ち上がり、裸になって笑顔を見せたまま花びらの上で動かなくなった。

爆撃機もヘリコプターも地上に落ちたときには花びらに変わり、操縦士も戦車の兵士と同じ形となった。

と、それらの変化と同時に空からチューブが伸びてきた。そして、花びらともども兵士を吸い込んで消えた。すべて、あっという間の出来事であった。

軍隊は消え、静かな森がよみがえった。

☆☆☆☆☆☆☆☆◇◇☆☆◇◇◇◇☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆◇◇☆☆◇◇◇◇☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

静けさは、ニュートリノと反ニュートリノが衝突して無のエネルギーを取り戻したかのようだった。

## 「善意基盤社会の弊害克服に関する予備的考察」

4、3、2、1、ゴオーツツ！！

ロケットは空の彼方に飛んでいった。

人々が見上げる空にも足を踏ん張る大地にも何も残らなかった。

いや、人々が、何も残らなかった、と思い込んでいただけだった。

実際、何も残らないはずがない。巨大なロケットは、膨大なエネルギーを消費して飛んでいったのだ。空に浮かぶこともできない金属の塊は、自分が浮かび上がる運動量を必要とし、そしてそれと同等の運動量を地球表面に残した。人々はその運動量の中に抱き込まれたのは間違いのないことだった。空を見上げていた人々の中には確かな変化が残されていた。人々はそれに気づかないまま、それぞれに家路についた。

\*\*\*\*\*

「募金をお願いしま～す！」

「私たちの国を世界一の技術国にしましょう」

「私たちは誇り高い民族として世界に誇りを持たなければなりません」

ロケット発射の次の日、街頭に立って叫ぶ人の姿があった。

「資源がない我が国は、科学技術立国でいくしかありません。しかし、国はいま、財政難です。ここは、私たち国民の力で支えましょう」

手には「我が国のロケットを世界一に！」と書かれた幟を持ち、胸のたすきには「進め一億、火の玉だ」、募金箱には「宇宙防衛基金」という文字が見えた。

その次の日、街頭に立つ人の数が増えたように思えた。またその次の日も人の数は少しずつではあるが、明らかに増えていた。

さらにその次の日、住宅街の一軒一軒のチャイムを鳴らし、募金を求めて歩く人の姿があった。

そして次の日には、全国の町内会に同じ内容の回覧板が回されていた。そこには「1口1兆円、2口以上の募金をお願いします」と書かれてあった。

回覧板の上欄には、“マイファミリーカード”の下4桁が表示されており、各家庭では家人が人差し指を赤い色の升に近づけた。そうすると、指紋を認証したという証拠に色が赤から黄色に変わり、もう一度押すと色が緑になった。その家は2口分2兆円を寄付したのだった。回覧板は国管理のスーパーコンピュータに接続されており、銀行口座からは正確に寄付金が引き落とされた。

\*\*\*\*\*

「いやあ、打ち上げのときにはひゃっとしましたよ」

「けがの功名か」

「打ち上げの時に“善意ビーム”が漏れるとは」

「よかったじゃないか。基金もどんどん集まっているし、ロケット切手の売り上げもよさそうだ」

ロケット切手とは「ロケット支援緊急時郵便貯金切手」のことで、ちまたではなぜか“弾丸切手”と呼ばれていた。

「まもなく“善意衛星”は静止軌道に乗ります。これで10個目です。まもなく世界平和が実現するでしょう」

「これでやっと世界から紛争がなくなり、善意衛星のおかげで枕を高くして寝られるようになりますね」

「人類の最高の理想の実現じゃな」

やがて衛星は静止軌道に乗り、10個の衛星から一斉に地上に向けて善意ビームが発射された。

地上の紛争はすべて消えた。

ジパング国国防軍は混乱に陥っていた。

「どことも連絡が取れません。情報網がすべて絶たれてしまいました」

「A B C D包囲網は予測していたことだろう」

「世界連邦の勧告が出され、友好国まで寝返ってしまいました」

「万事休すか。どうすればいい」

「外交部も手詰まりです。あとは首相官邸特命部の結果を待つしかありません」

「どうなるんだ」

「まったくわかりません。特命公務秘密法および関連法により、私たちには何も知らされていませんから」

実際にジパングの周りの海には、各国の情報遮断艇が数珠繋ぎに並び、列島を取り囲んでいた。無人の船からは空に向かって妨害電波のカーテンが広げられていた。

世界連邦は、ジパング政府に向けていくつかの要求を突きつけていた。

日く、自らを神国と呼ばず、覇権主義を放棄すること

日く、現在保有している、世界の98%にあたるプルトニウムを世界連邦の管理下に移すこと

日く、国内の難民および少数民族に対する差別的待遇および弾圧をやめること

日く、少女アダルトコンテンツ、過激な暴力的シーンばかりのゲーム、パチンコ賭博を集中豪雨的に世界の情報網に流すのをやめること

というものであった。

しかし、ジパング国政府からの反応はなかった。なんにも……。

「クマソ国からは、原発から出るプルトニウムはすべて国の管理に任せると言って来ています」

「これまでは地方の自決権を主張してきたが、これからは中央政府を全面的に信頼すると言っています」

一方、エミシ国は世論が別れていた。

「自分たちの神が一番だ」という意見が有力だった。

「自然と共生してきた自分たちの生き方を世界に発信しよう」

「世界中の愚かな民に、私たちの優れた生き方を教えよう」

それに対して「善意を押しつけてはいけない」という反論があり、また少数ながら「中央政府が掲げる“オオミカミ”が正当な神だ」と主張する勢力も現れた。彼らは、世界家族同盟を提唱、家族倫理教育法の制定を求めている。

「ロケットは神をもしのぐ」「ロケットこそ世界平和の象徴だ」と訴える集団もあった。ロケット党は中央政府ともつながり、募金活動を精力的に展開していた。

\*\*\*\*\*

「これほどジパングを神の国だと芯から信じている人間がいるとは思わなかった」

「ゲームに没頭していた若者が、見たこともない宇宙人から防衛しようという意識を持ったのではないのでしょうか」

「自分たちが一番の善人で、もっとも能力が高くて、世界中の愚かな善人を救うのだ、と思い込んでしまったのか」

彼らは、中華思想や十字軍従軍者には善意ビームが強くなるようにプログラミングしたが、ジパングの国民には同じレベルの線量しか浴びせなかったのだった。それは、ジパングの国民が社会の風潮に一斉になびくということを読み間違えたからか。一部の跳ね返りはないと考えてのことか。いずれにしても、風潮は一気に選民思想に向かって走っていた。

「家族の絆を強めることで社会の秩序を守る道德観が戻り、倫理が広がった。もう少しだったのに……」

「どうしてこうなったんだろう」

それは昔、この列島に起きた原発事故のせいかもしれなかった。

「あの連中は、浴びすぎたのだろうか。少なかったのだろうか」

それはもはやどうでもいいことだった。そろそろ結論を出さなければならなかった。

\*\*\*\*\*

人の皮を脱いだその下は防護服だった。

「やるか」

そう言うと、スイッチに手をかけ、一気に押した。その瞬間、地球を周回していた10個のロケットはすべて爆破された。

防護服を脱いだ。そこにはひからびた皮膚の人間がいた。その皮膚はみるみるうちに大気中の湿気を吸ってふくらんだ。水ぶくれの人間は静かに目を閉じた。

\*\*\*\*\_\*\*\*\*\*\_\*\*\*\*\*\_\*\*\*\*\*\_\*\*\*\*\*\_\*\*\*\*

地上には再び無秩序な世界が戻った。善意のカオス状況は記憶としても残ることはなかった。

## “幸福幹細胞”における背理的機能の検証

幸せは、不幸なときに感じる  
不幸わせは、幸福なときに感じる  
それはなぜ？

それは、  
小さな幸福と小さな不幸は、双子の子どもだから。

現実感謝すれば、小さな幸福が芽生え、  
現実を嘆けば、小さな不幸が育つ

小さな不幸は、大きな幸福の中で気にかかり、  
小さな幸福は、大きな不幸の中でよく見える

そして、大きくなる

それを“幸せ・不幸せの幹細胞”と呼ぶ。

「大きな幸福の中では、小さな幸福は見えない  
大きな不幸の中では、小さな不幸は見えない」

だから

「大きな幸福の中では、小さな幸福を大切にしなければならない  
大きな不幸の中では、小さな不幸を気かけなければならない」

だが．．．それは、いいことかどうか  
誰も保証はしない。

わかっていることは  
幸福も、不幸も  
もとは同じ、一つの幹細胞だということ――。

\*\*\*\*\*

「若者が結婚もせず、結婚しても子どもを産まない。困ったもんだ」  
「苦労して働いても年寄りを支えるだけ。自分たちは年金を貰えるかどうかわからない。今の生活も苦しいから、結婚や子育てなんか考えられないのさ」  
「それじゃあ家庭ができないじゃあないか。しつけも常識も教えられない。道徳は地に落ちる」  
「少子化は進むばかり。社会は衰退するばかりだ」  
「そこを外国がつけこみ、国境の島を奪い取る。我が国の領海内で魚は採り放題、珊瑚は荒らし放題だ」  
「軍事力で対抗しようとしても若者がいないしね」  
「そうさ。だから若者には結婚して子どもを産んでもらわないと。社会の秩序を維持するのも国家防衛においても、家庭は社会の基本単位なんだよ」

「戦争で若者が死んでいっても補充できるようにしないとイケない」  
「産めよ増やせよ！ お国のためだ」

\*\*\*\*\*

「あなたのことを一番わかってくれるのは家族です。家庭を大事にしましょう」  
「子どもは社会の宝ですから子どもは社会が育てます。安心して子どもを産んでください」

「家庭倫理を育て、社会秩序を守る会」は、全国の家庭、学校にチラシを撒いた。そこには新聞の政府広報にも似た文言が踊っていた。

政府は保育園、保育所をすべて国営にし、育児経験がある人をすべて保育士に任命した。地域には国営の「出産支援所（通称ハローベイビー）」が全国あまねく設立された。看護師よりもお産婆さんが優遇され、給料も高くなった。

しかし、地域で赤ちゃんの泣き声を聞くことはなかった。ハローベイビーの横に隣接して建てられた国民防衛隊出征所（通称サムライジパング）からは毎日のように屈強な若者がトラックで運ばれていく光景が見られた。

その中には女性も含まれていた。半数は女性が占めているはずだが、見た目には男女の別はわからなかった。産まれるベイビーは男女半々だが、男女防衛防災平等参画法により表面上、男女の区別はつかなくなっていたからである。

一方、高齢者向けの介護施設は倒産が相次ぎ、次々と消えていった。高齢者、障害者には自立が促され、福祉施設や病院から追い出された。彼らは、難民となり、暖かい南太平洋の島々を目指して粗末な船に乗り、海に出た。

南の島は母系社会で、弱い者を排除することはなかった。難民はボートピープルとなって、南の楽園を目指し、荒波にのまれて消えた。

\*\*\*\*\*

南の島の家庭は女が仕切っていた。子どもは多かったが、ある家の5人の子どもはそれぞれに父親が違っていた。女は「前の旦那は風呂敷一つで出て行った」と笑った。財産は女に属し、男はいつも無一文だ。男たちは海に出て魚や海鳥を採ることに精を出した。

南の島の慣習では、弱い者こそ守られた。もし、子どもから老人まで乗った船が遭難したとすれば、屈強な若者が先に死ぬだろう。それは食料が残っていればまずは子どもや老人に分けられ、魚が採れば男よりも女に与えられることになるからだ。

ある時期から南の島の海岸に老人と障害者ばかりが乗った船が打ち上げられるようになった。それは南の島の住人にとって大きな事件だった。しかし、海での遭難は多くはなかったが、珍しいことではなかった。

老人と障害者を前に島の長老が言った。

「この国の人たちはよほど立派な人たちなのだろう。若者は食べるものをこの人たちにやって死んだのだから」

「せっかく私たちのところに来てくれたのだから大切に迎えましょう」

老人と障害者たちは、島のそれぞれの家庭に引き取られ、家族として暮らすようになった。

その後も船は次々に打ち上げられた。遭難が続くのは珍しいことだった。

「どこかでなにかあったんだ」

「何が起きたのだろう」

人々は不安がった。何か大きな不幸に見舞われる気がしてならなかった。

「心配するな。心配が不幸を招く。私たちの島のことでないことで不幸になることはないのだ」

しかし、その島にも異変はすでに起きていた。真珠のネックレスのように連なっていた珊瑚礁の島々のいくつかはすでに海上から姿を消していた。

「島が沈んでいく。椰子の木が波にさらわれ、島が小さくなっていく。何か起きている」

「心配するな。私たちは土の上に立っている」

「根がむき出しになっている木もある。波が島を乗り越えてラグーンまで入り込むことも多くなった」

「人間が増えすぎたから島が沈んだんじゃないのか」

島の最高点は島と島の間にかかった太鼓橋の中央で、海拔2メートルしかなかった。

「島が沈んだら、椰子の木にハンモックのように家を作ってヤシガニのように生きていこう」

「椰子の木が流されたらどうするんだ」

「どうしよう」

人々にとって何もかにもが心配の種になってきていた。

「心配するな。本土に留学している島の若者たちが、島が沈んでも私たちが生きていける方法を研究している。もうすぐそれが完成するだろう」

\*\*\*\*\*

ある都市で「世界連邦温暖化地球対策会議」が開かれていた。

南の島の代表が叫んだ。

「地球は温暖になり、私たちの島はまもなく海の中に沈む！」

「私たちは、かつての領海の範囲の領空権を要求する！」

大国の代表が反論した。

「空は南極や宇宙と同様、連邦の直轄統治エリアである。自治国、地域に権利はない」

南の島の代表は必死だった。

「それでは世界連邦を作った意味がない。我々の国がなくなってしまう」

大国の代表も引き下がらなかった。

「島国でも先進国からごみ援助を受けて陸地を拡大したところもあるではないか。努力が足りなかったのではないか」

南の島の代表は訴えた。

「我々は流れ着いた人々を受け入れた。先進国を終われた人々も幸せに暮らしている。しかし、先進国は連邦樹立後も彼らが帰ることを未だに拒否している。あなたたちは自分の都合で老人や障害者を追い出し、今度は我々も彼らと一緒に宇宙にでも流れていけというのか」

大国の代表は開き直ったかのような態度で言った。

「そうだ。島国には船はたくさんあるだろう。それぞれ流れ着いた所で幸せに暮らせばよい。幸いなことに、昔と違って今は難民自動認定システムによって、海に漕ぎ出した瞬間に認定ができ、どこで受け入れれば幸せに暮らすことができるか、瞬時にシミュレートできる」

南の島の代表は明らかにいらだってきた。

「我々は今いる島で幸せに暮らしたいのだ」

先進国の代表は、さとすように言った。

「温暖化する前と事情が違うのだ。先進国と言われていた地域ではマラリアに加えて新型熱帯病が流行り、産めよ増やせよでせっかく増やした若者世代も死んでいった。砂漠化で食糧生産が減り、近隣諸国同士で略奪戦争が起きて兵士も民間人も死んだ。大きな犠牲があつて世界連邦ができたが、どこの自治国も余裕はないのだ」

かつての先進国では、武器庫にも空港や軍港にも兵器や軍艦、軍用機はたくさんあつた。そのほとんどは無人操作で動くものばかりだった。しかし、戦いに使われることはなく、実際には山を崩して平地をかさ上げしたり、海の埋め立て工事に使われることが多かつた。これを軍事技術の平和利用と呼んだが、設計時の想定をはるかに超える高温のため故障することも多かつた。

世界連邦温暖化地球対策会議の議論はいつまでも続いた。それはどこまでも“コップの中の嵐”でしかなかつた。

南の島の空高く、アドバルーンが上がつた。豆粒のように小さく見えるが、それは拡大した成層圏のぎりぎりの高さにあつたので、実際には珊瑚礁の大きさよりもはるかに広い面積の生活空間を確保していた。そこには真珠のネックレスと呼ばれた珊瑚礁の島々があり、ラグーンには魚が跳ね、鮫がそれをねらっていた。古ぼけたカヌーが並んでいる中に、ピカピカに光る双胴のカヌーも用意されていた。

アドバルーンには地上から高速エレベーターがつながっていた。よく見ると、アドバルーンから四方に何かが伸びている。それは釣竿のように見えた。いや、それは確かに釣竿に違いなかつた。

そこから垂れて来るのははたして幸せであろうか、はたまた不幸せであろうか。あるいは、何かを釣り上げるのか。

やがて、島は海中に没し、高速エレベーターも消えて、アドバルーンは小さな雲となつた。

## 「食文化における動物愛護精神の発展的展開と葛藤事例の研究」

これは、昔々のある島での出来事です。

ある少年の家では白いブタを飼っていました。

少年はブタに「花子」という名前を付けてかわいがっていました。背中をなざるとブタの毛は柔らかく、少年の心まで優しくしてくれました。花子はいつもおいしそうにイモを食べました。

あるとき、少年が学校から帰ると、家の横の川から「ギーッ！ ギーッ！」という聞いたことのないかん高い声が聞こえてきました。花子はいつもの小屋にいませんでした。それは花子の断末魔の声だったのです。

それから少年は豚肉を食べることができません。父親から「肉を食べないと大きくなれないぞ」と言われて口に押しこんでもはき出してしまうばかりでした。

でも、少年は中学校に入ったらいつの間にか豚肉を食べていました。

☆☆

昔々、ある都会の小学校では、子どもたちが飼っていた豚を食べるという授業があり、テレビや映画で話題になった。いくらかわいくても豚は人間に食べられる存在で、授業は食育だということだった。残酷だからといって現実から目を背けてはいけない、ということだ。

別の小学校では、子どもたちが鶏を飼っていた。子どもたちは大きくなった鶏を食べるかどうか話し合い、食べることになった。先生が屠殺（とさつ）場に持っていったら、屠殺はできるが、法律によって一般人に肉を渡すことはできない、という。

先生は、肉屋で買った鶏肉を子どもたちに食べさせた、とさ。

☆☆

これも昔々のある島での話です。

少年が小さかったとき、お父さんが「おまえのだよ」と大きなヤギを連れてきました。少年はひもをわたされましたが、ヤギにずるずると引きずられてしまいました。

そのヤギが子どもを2匹産みました。少年は喜びましたが、二匹とも死んでしまいました。ヤギの子どもを埋めたその上に、少年は時計草の苗を植えました。時計草はみるみるうちに大きくなり、隣のリンゴツバキの木をおおいました。

その時計草の実が甘酸っぱい味がしました。

村のかじ屋にヤギを食べるおじさんがいました。その村ではヤギが珍しかったので、少年の父親に「ヤギを売ってくれ」としつこく言ってきていました。少年は「いやだ」と言いました。

少年はヤギを連れて草を食べさせに行くとき、鍛冶屋にさしかかると回り道をしました。ヤギも前足を突っ張って、鍛冶屋の前を通るのをいやがりました。

ある日、少年が学校から帰ると、ヤギがいなくなっていました。

おじさんに売られたのです。少年の心にぽっかりと穴があきました。

でも、1年もするとヤギのことを忘れてしまいました。

時計草の実の味は甘酸っぱいままでした。

☆☆

これは、高い山がたくさんある南の島の遠い昔のお話です。

少年が小学5年になって、クラスの先生と友だち4、5人で大きな滝を見に行ったときのことです。

滝の水がはげしく落ちて水けむりが立っているところになにかが浮かんでいました。

シカです。

先生が岩から身を投げ出し、先生の手を子どもたちが引っ張ってシカを引き上げました。

シカは傷ついていた。

「犬に追われて滝から落ちたのかもしれない」

先生が言いました。

「学校で飼おう！」

子どもたちが言いました。

そこで、先生の家まで運び、教育委員会に電話をして飼ってもよいという許可をもらいました。

でも、シカは傷ついて弱っていました。そしてとうとう死んでしまいました。

先生の家の下に住んでいた男の人が包丁を持ってきて「食べよう」と言いました。

少年たちは「いやだ！」と言いました。

そのあと、大人たちはなにやら相談をし、どこかに連絡をしたりしていました。

少年たちは家に帰りました。

その夜、それぞれの家にシカの肉が配られました。

少年は食べませんでした。

少年はホテルの社長になりました。

そのころ、ジビエ料理が流行ったそうです。

あるとき、ホテルの試食会でジビエ料理が出ました。社長はいつも味を厳しくチェックします。その日のテーマは野生の鹿肉でした。

社長はすぐに気がつきました。ちょっと躊躇したようでしたが、横にいた料理長と2、3言葉を交わしたあと、一気に口に入れ、二口噛んだあと飲み込みました。

その鹿肉は、北の島で獲れたものでした。

☆☆

「昔はよかったなあ」

「ああ、コンビニで賞味期限が切れそうな弁当をいくらでもくれた」

「おれはたくさんもらってホームレス仲間に配ったよ」

「俺は売ったりもしたな」

「あのころは賞味期限が切れた弁当を売った業者が告発されて、つぶれたところもあった。厳しかったなあ」

「でもそれで俺たちは飢えなくてもすんだんだぞ」

「それが、もったいない、厳しすぎるとなって規制緩和だ。賞味期限後も管理がしっかりしていれば売れるようになった」

「安くしてね。俺たちは買えなかったけど」

「賞味期限後食品を食べる運動も起きたよね」

「格差がひどくなって、食事を満足に食べられない子どもたちや独居老人が増えたので、大量に福祉団体が引き受けているという話も聞いたぜ」

「どっちにしろ、俺たちのところには回ってこなくなったんだもんな」

「いや、俺たちだって団体を作ればいいんじゃないか？」

「お前、新顔だな。ホームレスにしてはアグレッシブすぎる。けどな、団体を作るには住民票がいる。住所がないとダメなんだよ」

「あれ、知らないの？ これ」

「なんだ、それ？ 金ぴかだな」

「マイナンバーカードプレミアムだよ。ホームレスでもこれを持てば、住民票がなくても大丈夫」

「へえ、そんな便利なものができたんだ。それは俺でももらえるのか？」

「もらえるよ。役所で申請すれば。ただ、お尻に注射を一本打つだけ。1ミクロンの居所

チップを埋め込むだけですむんだ」

☆☆

いつの頃かわからないが、人間の食文化が最高に進歩した時代があったそうな。それはそれは人間にとって素晴らしい夢のような社会。その時代は「超絶美味期」と呼ばれていたという。

レストランでは、お客さま一人ひとりの嗜好に合わせて顧客満足度 100%の料理が出された。お客さまがお店に入ったとき、すでにオーダーは厨房に通っていて、お客さまが席に着いたとたん、出来上がったばかりの料理が運ばれるのだ。

刺身が食べたいと思ったお客さまがお店に入ってテーブルに座ると、もうそこには新鮮な魚の活き作りが出されることだろう。ピクピクと規則的に振動する心臓をも見るることができるかもしれない。

それは、一つは、完全版自動判定快適システムのせいだ。人間の情報は、嗜好も信念も、行動パターンや心の動きさえ中央情報アプリ（CIA）によって集積され、24 時間 365 日行動が補足されていた。だから、ある人間がお腹をすかして何を食べたいか、近くのお店に入るか、すべて CIA はわかっていた。そういう情報は本人が意識することなく総合データセンターに集められ、必要なときに必要な情報が必要な場所に自動送信された。お店に送られた情報から、自動調理システムがちょうどいい時間に料理を出すという仕組みができあがっていたのだ。

料理が提供される時間だけでなく、その味も抜群においしかった。といっても、誰にでも同じメニュー、同じ味付けが出されるわけではなかった。それは、お客さま一人ひとりの好みによって微妙に調整された“あなただけのメニュー、あなた好みの味”だった。

食材にも秘密があった。魚も牛も鶏も直前まで生きていた。当時は生きたまま凍結する技術が確立しており、お客さまの情報が届いたとたんに解凍されたのだ。刺身はそれまで泳いでいた魚を生き絞めた味そのものだった。熟成したふぐの肉が好きな人には、きっちり3時間前に血抜きにされたふぐが出された。

この冷凍技術は、かつての地球温暖期に開発されたものだった。人々は地球が熱帯化するなかで自分たちを生きながら冷凍することを考えた。その冷凍冬眠技術はあらゆる生き物に応用された。やがて、地球の極地を凍らせて冷風で地球全体を冷やし、気象を穏やかにするまでに進歩した。生物はもとの生活を取りもどした。

その何百年の間、地球から放出されたエネルギーで、宇宙はいくらか温暖化しただろう。そして、地球以外の宇宙はいまでも地球からのエネルギーを吸収し続けている。

もしかしたら地球は宇宙からの逆襲を受け、これまで以上の温暖化や逆に氷河期が訪れ



「まるで宇宙創生期だ」

しかし、違うのはいくつもの宇宙が一つの空間に錯綜して同時に存在している、ということだった。

「どうしてこうなったんだ」――少年は少年に聞いた。

この世では、「生物の基本的権利を最優先する世界条約監視機構」がもっとも権力を持っています。といっても、混乱によって組織というものがすべてなくなったので、もちろん世界条約監視機構も存在しないんですけどね。

組織がないということは、規則を変えるところがないということですから、監視機構があった時代の規制やルールがそのまま続いているのです。

一番力を持っているのが「自然に死んだものしか食わない」というルールです。

子牛、子羊、子豚の料理はめったにありません。子どもの時に自然死することが少ないからです。

すなわち、動物愛護が絶対的原理になったので、人々は死んだ動物しか食べてはいけません。また、死んだ生き物は徹底して社会の役に立てなければなりません。それが生物の尊厳を守ることとされています。

人間を火葬にするのも禁止で、土葬にしたあと 10 年したらその土を畑に撒くことになっています。いい野菜が取れますよ。

少年は思った――時間を失ったこの地球上にはすばらしい循環系環境が実現していた！

そのときその社会では、生物の基本的権利だけでなく、無生物の生存権についても議論が続いていた。やがて、地球の自決権、そして宇宙の権利のあり方についても話題になるだろう。

しかし、少年はわかっていた。議論は進んでも何も決まらないことが。なぜならそこは、時間というものがなく、秩序もなくなっている社会だったからである。

## 「世界同時秩序破壊による食糧危機を回避する方法の研究序説」

「おいしいね!」「このカレー、最高だね」

子どもの声はずみ、笑顔がはじける。何といても子どもには笑顔がふさわしい。

この時間ばかりは、親も、ボランティアスタッフも、特別参加の独居老人も、体一杯に柔らかい心が染み渡った。子ども向けに辛さを押さえたカレーは、誰の口にも甘い思い出を残した。

これは昔、ある国で流行した“子ども食堂”のひとこまである。

子ども食堂とは、母子家庭や父子家庭あるいは共働きの家庭で、子どもが一人きりで食事をする、いわゆる“個食”“孤食”が社会問題となり、ひどい場合は食事ができない子どももいることから、ボランティア団体が集団で食事ができる場を作ったものである。それは、一瞬でも子どもたちの心と体を健康にしたが、親の心をも癒し、児童虐待を減らす役割をはたしたかもしれない。

あるとき、国から子ども食堂にお達しが出た。

「不特定多数に食事を提供する場合は、基準に合った厨房を使い、資格のある管理者を置かなければならない」

つまり、国の許可を取れというのだ。

困ったボランティア団体は、町の食堂のおっさんをメンバーに引き込み、その食堂を会場にした。他の団体では会場が見つからずに活動を断念したところもあった。

ボランティアたちは考えた。問題の本質は何かと。

大企業ばかりが優遇され、福祉や医療のお金は削られるばかりで、庶民は低賃金長時間労働と貧乏にあえいでいる。格差は広がり、子どもの貧困率は世界一になっていた。

――独裁政治を倒さないとだめだ。みんな、立ち上がろう！

運動が盛り上がりそうとしたとき、政府は規制緩和策を発表した。

「子ども食堂に許可はいりません。どこでも自由に開いてください」

☆☆

昔、その国では“夜間中学”という制度があったということです。2、3回前の世界大戦の後にできたらしく、貧困や戦争のために学校に行けなかった人のために公立中学校に設置したということを知りました。戦争が終わって100年ほど過ぎても夜間中学校はなくならず、自主夜間中学校の運動もできて、不登校で学力が低かったり、外国人労働者で日

本語を身につけたい人が学んだようです。

なぜ夜間中学校がなくならなかったのでしょうか。なぜ、戦争で学校に行けずに字も書けない人たちがいなくなっても、夜間中学校に人が集まったのでしょうか。

不登校が増えた時期は、学校でいじめが増えた時期と重なるそうです。その後少子化が進んで若者が減り、労働力不足から外国人労働者が大量に入り込みました。さらに国の財政が破綻をして国民の所得格差が拡大し、学校に通えない貧困家庭の子どもたちが増えたということです。貧困家庭の子どもは教育を受けられないまま、ブラック企業の労働者として低所得長時間労働を強いられ、夜間中学校に通うことができる人は一部の人にすぎなかったそうですが、それでも夜間中学校はなくてはならない存在でした。

そのうち、戦後処理としての役割が終わったということで公立の夜間中学校は廃止され、ボランティア団体が運営する自主夜間中学校だけになりました。そうしているうちにも社会の格差問題はますます深刻になっていきました。

昼間の中学校はとみると、大富豪は私立の中学校に子どもを通わせ、中流家庭は格差の拡大で中流層そのものが存在しなくなり、残りの貧困家庭は公立中学校に通わせられなくなったので、ついに昼間の公立中学校はすべて廃校になってしまいました。

多くの子どもたちは単純労働をしながら夜間中学校に通いました。

夜間中学校の需要が増えたため、夜間中学校を運営する業者が現れ、さまざまな形式の有料夜間中学校が出現しました。なかには、仕事付きの学校もあり、国が奨励したもんぺや国民服を縫わせるところもあったようです。完全個別対応型人工知能指導システムを開発した情報企業も参入しました。

しかし、夜間中学校の隆盛も長くは続きませんでした。入学しても学費を払えない家庭が続出し、倒産する学校が多かったのです。

そのうち、誰でも無料で使えるスーパーネットを利用して、無料の学習サイト「スーパーナイトスクール」（超夜間中学校）が立ち上がりました。ナイトと言っても 24 時間利用できるシステムなのですが、なぜかナイトでした。おそらく、多くの利用者が昼間働き、夜勉強したからでしょう。

そのナイトスクールも大きく盛り上がったあと、急速に世間から忘れ去られてしまいました。ほとんどのサイトが広告収入で運営していたのですが、貧困家庭にいくら宣伝してもまったく効果がないので、広告主が去り、次から次へとつぶれたからです。

実は、私は貧困ビジネスで一儲けし、その金をナイトスクールにつぎ込んだのですが、どうしてもうまくいかず、とうとうすっからかんになってしまいました。

一体、なぜ人は学ばなければいけないのでしょうか。なぜ卒業資格が必要なのでしょうか。私にはわかりません。

でも、時代に翻弄され続けてきた貧困家庭は気がつきました。

学力がなくても、卒業証書がなくても、お金がなくても、幸せに生きていくことはできる。お金の汲々としなければいいんだ。時間にきゅうきゅうとしなければいいんだ。人を幸せにするのは知識だけではない。卑屈になる必要はない。愛情は、ゆったりした心の中で育まれる。そうだ。自分たちの夜間中学校を作ろう！

——私はそのリーダーです。

☆☆

——お金を銀行に預けるにはお金が必要です。——

「アニキ、銀行に変なことが書いてあるよ。お金を預けるのにお金がいるって、どういうことだ？」

「お前は知らないのか。お金を借りれば、お金をもらえるんだ」

「え〜!? 俺は頭がおかしくなってきたよ、アニキ。じゃあ、泥棒してもお金がもらえるかな？」

「ただ盗むだけじゃあだめだ。使わなけりゃあ。どんどん使えば、景気をよくしてくれると表彰されて、英雄勲章がもらえるんだ」

「じゃあ、俺は英雄だ」

「お前はパチンコばかりしているからどうかな。パチンコは不景気でも流行っているから評価は低いだろう」

「じゃあ、お金を何に使えばいいの？」

「そうだな。今の政府はトリクルダウンという麻薬に冒されていて、大企業ばかり優遇しているから、車を買うか、家を新築すればいいんじゃないか？」

「じゃあアニキ、車を盗んで来るよ」

「待て待て、それじゃあ景気をよくできないだろうよ。お金をため込んでいるお年寄りや大企業からお金を盗んで、物を爆買いするんだよ」

「お金をばらまくって、銀行の仕事だろ」

「それができれば我々はいらなくなっちゃうぜ。個人も会社もお金を使わないから、俺たちが盗んで無理無理使おうって訳なんだよ」

「え〜〜！ 知らなかった。でも、警察に捕まらないかな」

「安心しろ。絶対に捕まらないんだ。なんせ、これは国策なんだから」

☆☆

昔、西洋連邦のG国の借金が膨大になり、他国から借りていたお金を踏み倒さないとやっつけていけなくなった。世界の経済秩序が崩壊すると大騒ぎになったが、その陰で、東洋の一角を占めるJ国では、GDPの100倍以上の負債にあえいでいた。

政府の公式発表では、「借金はほとんど政府が国民から借りているものなので、踏み倒しても外国に迷惑をかけるものではない。従って国際的には健全財政である」としていた。

しかし実は、J国は秘密裡に世界の警察を自認するA国と自由協定を結んでおり、軍事と外交を委ねる代わりに、経済についてはとことん支えるという約束が結ばれていた。G国の上空ではA国軍機が自由に飛び回っていた。その合間に民間機が飛び、そして降りた。駐機場には軍機に挟まれて形見の狭い思いをしながら民間機が縮こまるように納まっていた。

J国の経済は明らかに破綻していた。A国はその事実を認めなかったが、その影響はA国にも徐々に浸透しており、A国内の専門家の間にも不安を広げていた。

J国は、紙幣と国債をただひたすら刷り続けた。その額は確実にGDPの千倍を超えたと思われたが、誰もその実態を知らなかった。

「本日より、紙幣と国債の偽物を無効にする」——ある日、政府から通達が出された。そこには、偽物の紙幣と国債の写真が出ていたが、市中に出回っている物とほとんど同じ物だった。

「私が持っているものは本物よね」——「いえ、偽物です」

「俺のは政府直轄販売所で買ったんだ」——「残念ですが、それも偽物です」

ほとんどの紙幣と国債が無効とされた。

実は、膨大な量を一気に製作したため、国が発行したものはどれも目も当てられないほどの粗悪品だった。それで、本物の偽造品も本物の本物もすべて偽造とされ、すべての紙幣と国債が廃棄された。国の借金は一瞬にして消えた。J国は通貨を持たない国になったのだった。

☆☆

「米をください」

「あなたの家族は3人だから3升ね。米穀通帳を見せて」

「はい」

「キャベツや鶏肉はいらないの？ まだ配給枠は残っているわよ」

「大丈夫です。十分足りてます」

「そうね。今は食べるものがあるからいいわよね。お金ばかりが出回っていた時代と比べれば、お金がない今の方が幸せね」

生存権的基礎所得保障（ベーシックインカム）制度による配給事業が始まったのは、ある国の財政破綻が発端となって、負債をちゃらにするデフォルトという国家レベルの倒産

が世界に連鎖し、地球上を席卷して起きたあとだった。それは後に“世界同時デフォルト”と呼ばれ、歴史にその名を残した。

「米穀通帳は、個人認証にも使えるし、便利ですね」

「家庭に一通だから家族の絆も強くなったわよね」

「祖父祖母の時代は、老後が不安だとお金を貯めるのにきゅうきゅうとしていたようですが、私の子供たちはお金という言葉さえ知りません」

「そういう時代になったのね。さあ、今週から少食健康増進キャンペーンが始まったのよ。世界連邦食糧交換レート調整会議で米とバナナの交換レートを切り下げられないようにするために、自給率を上げないとね」

「国の政策も、食糧安保法制ができて食糧防衛最優先ですからね」

「でも、憲法の生存権を守るのが先。これがないと米穀通帳もなくなるのよ」

「そうですね。世界的にもデフォルト前の思想を復活させようとする“マネールネサンス運動”が大きくなってきたようですしね」

「そうよ。自由と言っても、生きる権利を奪う自由が出てきたりするから気をつけましょうね」

☆☆

一体、この地球という惑星は、どのくらいの数（量）の生物の存在を許してくれるのだろうか。

生物は資源を吸収し、異なる形に変える。その機能を維持しながら生物は、人類が“進化”と呼ぶ生物学的変化によりその生態を変え、そして地球環境を大きく変えた。

いま、世界連邦は、生物が、いや人類が増えすぎて地球が持つキャパをはるかに超え、食糧を制限せざるを得ないことを認めている。世界連邦生物危機管理委員会は、地球上で生存できる人類の上限は10億人であることを公表した。そうすると、地球上での生存権は10億人にしか与えられないことになる。それで、ホモサピエンス保護条約締結国会議で生存権をどのように割り振るか、議論が続けられているのだ。そこではある国の米穀通帳制度が高い評価を得ていたが、その国の政府は特殊秘密絶対保護法をたてにデータ提供を拒み、結論は出なかった。

☆☆

10億人に膨らんだ人類は、食糧不足によって滅びようとしていた。そうなれば、地球上では連鎖循環系の輪が切れてすべての生物が死に絶えるだろう。

しかし、地球には人類が溜め込んできたゴミがある。もしかしたら、地球はいつの日か、人類が残したゴミを資源とし、新たな“生き物”を作り出すのかもしれない。

## 「宇宙の本質究明に向けた庶民皮膚感覚的試論」

しばらくの間、ばかばかしいお話でお付き合いのほど、お願い申し上げます。

熊五郎:こんにちは。ご隠居いるかい。

隠居:おや、誰かと思ったら熊さんじゃあないか。まあ、お上がり。

熊:ごちそうさまです。

隠:なんだい、そりゃあ

熊:ええ、まんまお上がり。

隠:おまんまじゃあないよ、相変わらずお前さんは食い意地がはってるね。

第一ね、私は落語をやるってんじゃないんだよ。

熊:またあ、そんなこと言って。第一、熊さんにご隠居と来れば落語に決まってるじゃないですか。道理に合わないこと、言わないでくださいよ。

あ、そう言えば、道理に合わないって、この前、北の国がドーンと打ち上げましたね。

隠:ああ、あれは道理に合わないな。どうやったって世界から嫌われるのがわかってるのにやるんだからな。

熊:いえね。当人がロケットだ、人工衛星だって言っているのに、赤の他人がミサイルだ、大陸弾道弾だ、って言っているのはどういう訳なんです。

隠:いや、熊さんの前だが……

熊:後ろにまわりましょうか。

隠:いや、回っても一緒だ。

実は、我が国以外では、ロケットだ、人工衛星だ、と言っている方が多いんだ。

熊:じゃあ、なんだってこの国はわざわざ物騒な言い方をするんです？

隠:為政者にはその方が都合がいいんじゃないだろう。ニュースも受けがいいし。

熊:失敗したら打ち落とせ！ なんて威勢がいいから威勢者。

隠:ちょっと違うな。第一、失敗してよたよたしているのをパトリオットでは落とせない。

熊:おっとりしてるんだね、そのトリは。

ところでご隠居、そのロケットで考えたんですが、ロケットって宇宙に向かって飛ぶでしょ。ずう~っと飛んでいくってえと、そのあとどこへ行くんです？

隠:まあ、ロケットが行くわけではないが、ずう~っと行ってもずう~っと宇宙だな。

熊:どこへ行くんです？

隠:どこまで行っても宇宙だ。

熊:そこを越えずう~っと行くとどこへ？

隠:宇宙だ。

熊:強情な隠居だね。まだまだずーっと行くとどこまで行くんですか。

隠:やっぱり宇宙なんだよ。

熊:なんだか宇宙ってやつがわかんなくなってきたね。

ご隠居、宇宙って果てがないんですか。

隠:そうだ。宇宙は果てしないものなんだ。

熊:ご隠居は行ってみたんですか。

隠:行くわけないだろう。

熊:じゃあ、信用できねえな。本当は知らねえんだ。

隠:バカなことを言ってはいかん。私の沽券にかけても嘘は言わん。

熊:でも、道理に合わないじゃあないですか。行っても行ってもどこにも着かないなんて。

隠:う〜ん、いや思い出した。着くんだ。

熊:どこに？

隠:地球の裏側に。

――そこが、宇宙の果てだったんだとき。(チャンチャン。)

☆☆

そのとき突然、時空先生が――その名前は本人が後で自ら名乗ったのだが――講堂に現れた。学生にとって初めて見る顔だった。いや、それは顔なのだろうか。髪の毛が渦巻き、その奥にぎょろりとした目らしい光があった。

「私は、プロフェッサージクウです。次元からできています。皆様の前では4次元ですが、137億年前は11次元でした」

学生たちはきょとんとしていた。

「実は私は時空間なのです。私の今日の顔はブラックホール、おしりはホワイトホールを使いました。諸君には私の本性は物の動きを通じてしかわからないでしょうから、君たちに見えるように物をたくさんくっつけて来たのです」

学生たちは事態を理解しようと、それぞれに脳を高速回転させ、宇宙方程式の別解を探し始めた。

「君たちの知識で私を理解するのは無理です。あなたたちが意識を向ける限り、宇宙には無数の課題が存在し、無数の解があります。それは、解がないということと同じことでもあります。問題は、皆さんが自分の活動に意味を持ち続けられるか、ということです。私はそれを伝えようと、今日ここにやって来ました」

――「ハックション!!」

時空先生の話が終わりかけたとき、最前列の学生が大きなくしゃみをした。そのはずみか、時空先生の頭とおしりがプルンと震え、急速回転したかと思うと、おしりから愛飲酒隊員II先生が転げ落ちた。

「あ、先生!!」

学生たちは、見なれた先生の顔に緊張がほぐれたのか、一斉に我に返ったような声を挙げた。時空先生の姿は消えていた。

(注1:昔々、あるところに愛飲酒隊員という偉い方がおられました。質量とエネルギーは同じもので変換可能だとか、光の速度に近いと時間が縮まるとか、質量は時空を曲げるとかいう、相対性理論を提唱した人であります。愛飲酒隊員II先生はその子孫なのです。)

講堂では、授業が始まった。愛飲酒隊員II先生は、学生たちを前にこう切り出した。

「あなたたちは、私たちがいるこの宇宙の大きさを知っていますか？」

「先生、この宇宙に境界があるんですか？」

「あると思えばある、ないと思えばない。そのうちわかるかもしれないし、永遠にわからないかもしれない」

「禅問答みたいですね。では、宇宙の大きさは何ですか」

そこで、先生は宇宙の起源を話し始めた。それは大雑把に言うと、次のような内容だった。先生の話は、科学雑誌『Newton』と同じくらいよくまとめられ、わかりやすかった。ただし、途中までは。

——私たちの宇宙は、約 137 億年前にできたと考えられています。最初はすべて無の世界でした。しかし、なにもなかったわけではありません。そこでは、エネルギーの揺らぎがあり、小さな宇宙ができたり消えたりしていました。

あるとき、まったくの偶然から、いや必然といっても何の違もないのですが、一つの宇宙に、インフレーションというとても大きく超大規模な膨張が一瞬にして、いや一瞬の何兆分の一よりもっと短い時間、むしろ時間という観念ではとらえられないくらいに間に起き、続いてビッグバンという灼熱の宇宙ができました。

なぜそういうことが起きたか、いまのところ誰にもわかっていません。もしかしたら、重力波の観測で何か証明できるものがみつかるかもしれません。運がよければ、そこに私の名前が載るでしょう。あるいは、あなたの名前かもしれませんね。

(注2:実を言うと、先生の父親も祖父も愛飲酒隊員IIという名前でした。子々孫々、偉大なる先祖様が予言した重力波を探し、他の研究者が重力波を観測してからは重力波観測によって宇宙創成の謎に取り組んできたのですが、歴史に残る業績がなかったため、ずっと同じ名前を継承してきたと言われていました。)

——宇宙ができたときには宇宙はプラズマで満たされており、光が通じない、いわば闇でした。宇宙創成 37 万年後に宇宙が“晴れ上がり”、光(電磁波)で満たされました。いま、観測できるもっとも古い光はその時の光です。その前の宇宙のことは光の観測ではわから

ないので、宇宙創成の手がかりを知るために重力波を追いかけているというわけです。

「ところで、最初の質問の、宇宙の大きさはどうなったんですか？」

—そうそう。ビッグバン後も宇宙は膨張し続け、いまでもどんどん大きくなっているのじゃ。私たちが理論上観測できる範囲は、私たちから見て約 465 億光年先までということになっている。すなわち、それがとりあえず宇宙の大きさということかな。

先生は、そこで授業を終わろうとしたが、学生たちはそれを許さなかった。

「私たちが尊敬する偉大なる科学者、愛飲酒隊員先生は、光速よりも速いものはない、とおっしゃいました。宇宙ができてから 137 億年ということは、そのときにできたものはいくら速くても 137 億光年までしか広がらないのではないですか」

「いや、宇宙は一時期、光より速く膨張したんじゃ」

「光より速いものがあるんですか？ 相対性理論は成り立たないんですか」

「いや、その、すなわち…。実は…。花は咲けどもヤマブキノ、う～ん…」

先生はちょっと戸惑った様子だった。しかし、すぐに威厳を取り戻し、冷静な解説を始めた。

—宇宙は空間であって物ではない。したがって、空間が光速よりも速く膨張しても、大偉人の理論と矛盾はしないのだ。

「空間が膨張しているとき、宇宙のはしにある発光物体からの光は光速で伝わるんですか」

「なかなかいい質問だ」

先生は、すでに冷静さを取り戻していた。

—空間が膨張しているということは、光が存在する空間そのものが広がっているのだから、遅くなるじゃろな。

「先生、大偉人は光の速さは一定であると言ったのではないですか。でないと、光速を基にした光年という単位も曖昧になってしまいます」

「いや、光にだって都合がある。いや、光の意思でなく、いやそうではなく…。ご先祖はなんて言ったんだ。う～む、言語道断横断歩道！ 見たことないからわからんちん」

しばらく意味不明な言葉を連発したあと、先生は、我を取り戻したようにきっぱりと言いつつ切った。

「実はこういうことなんだ」

—空間というものは絶体的存在であって、神様みたいなものなのじゃ。いわば宇宙の精神世界であって、そこがしっかりしていないと世の中を見ることができない。光は光子という粒子だから物質世界の存在であって、物質同士の関係性に関する理論がわが大偉人の

理論なである。

「では、その辺のことは次の時間にお話ししましょう。くれぐれも欠席しないように」

先生は、学生が科学雑誌を読んでくれればここまで話をしなくてもすんだかもしれない、と思いながらそそくさと授業を終えた。

その授業はすべて遠隔で行われ、学生たちは脳内受信装置で受けていた。そこには、授業の補助教材として、先生の頭に浮かんだ出典も示されることになっていた。当然のことながら、授業の発展学習用としてその科学雑誌も配布された。しかし、どの程度の学生が納得したかどうかは、授業評価測定システム本部にしかわからなかった。

☆☆

八五郎：ご隠居、いるかい。

隠居：おお、八つつあなか。まあ...、お上がり。

八：ありゃ、今日はおまんまなしか。

隠：熊さんと同じだね。今日はどうしたい。

八：宇宙の形ってどんなふうになってんですかね。

隠：これも熊さんと同じだね。お前たちはどうなってんだ。

八：いえね。このごろ、熊が何かというと宇宙、宇宙って、うなされているんでね。あっしまで気になっちゃって。どうなってんですか。

隠：さあ、どうなってんだろな。

八：海みたいに平らになってて、はしっこが滝みたいになってるとか。滝じゃあなくて壁があるとか。

隠：そうかもしれん。じゃが、前にも上にも星があるな。

八：じゃあ、風船みたいに丸くてそのなかに俺たちが閉じ込められているとか。

隠：閉じ込められているわけではないだろうが、もしかしたら丸いのかもかもしれない。

八：そしたら、宇宙の果てに行けますね。

隠：何も知らないんだね。お前はこの宇宙がどんどん広がっているってえことを知らないのか。

八：またまたあ、適当なこと言って。本当は知らないんでしょ。

隠：適当ではない。だいたい、宇宙てえのが、広いのか狭いのか、他にもあるのかなのか、広がり続けるのかそのうち縮まるのか、さっぱりわからないのだそうだ。

八：じゃあ、何も知らないのと同じことですね。勉強するの、や~めた。

八：勉強したこともなくせに。だいたい、おまえのは無知と言うんだ。私が言っているのは未知だということだ。

八：何だって？ 俺がムチでご隠居がミチ？ そりゃ、おかしいや。俺は八チだ。

(チャンチャン)

☆☆

愛飲酒隊員II先生は、ついに宇宙創成期の重力波を測定し、分析に成功した。世界的に有名な科学論文誌に投稿し、大騒ぎになった。

一斉に世界各地で追試が開始されたが、いつまで経っても成功したというニュースは流れなかった。そしていつしか、愛飲酒隊員II先生の名前は忘れ去られた。

その日、先生は自宅の地下に作った研究室に閉じこもったままだった。そしてその日も「無限宇宙はあります！」と記者会見の予行演習をしていた。だが、これまで一度も釈明の記者会見が実現したことはなく、その後もありそうにもなかった。

本に書いて世に訴えようかと、出版社からの誘いもないのに妄想に耽ったそのとき、研究室の壁ディスプレイが青く光った。先生は頭の中でOKを出した。これが赤だったら無視しただろう。赤は、人類の歴史上ずっと危険信号だったのだから。

「先生、喜んでください。私も見ました。無限宇宙です。ありました！」

かつて講堂で、大偉人の子孫である先生を問い詰めた教え子からであった。

「これから論文にします。記者会見に出る準備をして待っててくださいね」

先生の大偉業は、重力波望遠鏡で無数の宇宙を発見したことだった。それはまるで何万本もの万華鏡を見ているような世界で、記録しようとするそれぞれの宇宙は姿や色を変えた。大偉人の理論をしのぐ大発見であった。

無数の宇宙の一つとみられる我々の宇宙は、これまでの観測によって膨張していることがわかっている。今回の観測によって、その外側に無数に宇宙があり、それぞれが押し合いへし合いしながら存在していることがわかった。そして、それぞれは、大きくなったり小さくなったり、つながったりちぎれたりしながら無限に広がっているというのが、先生の新しい理論だった。

教え子の発表によってやっと世界連邦宇宙科学学会宇宙原理関連調査委員会が発足した。しかし、やはり同じ現象は確認されなかった。

先生が教え子と二人で「それでも無限宇宙はあります！ 私は見ました！」と発声練習をしていたとき、無限宇宙が確認されたい、という噂を耳にした。慎重を期するためにまだ公表はしていないらしい。二人はそっと、調査に携わっている研究者の様子を見に行った。

「こんな、いつわかるかしのれない追試がなんになるんだ。自分の業績にもならないし、時間の無駄だ。酒でも飲まずにいらりょうか、てんだ。バックスを持って来い！」

研究者はぐでんぐでんに酔っぱらっていた。他の研究者も同様だった。

「おい、また出たぞ、無限宇宙が」

「ほっとけ、そんなもの。記録しようとしてもできないんだから。なんせ、手が震えるほど飲んだときしか出ないんだからな」

先生と教え子はきびすを返し、研究室の片隅に座りこんだ。そのまま時間が過ぎた。

いつの間にか、先生の足元には「バックス」と書かれたラベルの芋焼酎の空ビンが転がっていた。あのときと同じだった。そして、年賀に教え子に贈ったのも「バックス」だった。夢は終わった。

――だがしかし、万が一、いや 137 億光年数に一つでも、「バックス」のなかで、小宇宙が誕生することはないのでしょうか――

☆☆

最近、ある新興宗教が流行っているそうだ。

その名は、ペロガミ様を崇め奉る「アカンベー光教」という。入信資格はただ一つ。無神論者であることだけだ。

※通勤電車で書いたので通勤電車で読んでください（筆者）。

不条理ショートストーリー07

## 「無ストレス社会への絶望的渴望による情況展望」

B子:世の中、健康ブームですね。

A介:そやね。いろんな健康法があるらしいわ。

B:健康かどうかのバロメーターを教えましょ。あなたは寝付きがいいですか。

A:いいんですわ。布団に入るとコロン。ボタンキュー。

B:はい、さいなら。

A:なんのこっちゃ。私はね、ふかふかの布団に入ると、幸せ一杯。神様、このまま目が覚めなくてもいいです。

B:なみあぶだぶつ。

A:そんなにしてまで、私を殺す気？

B:大丈夫です。目を覚まさせましょう、私の熱いキスで。

A:あべこべやがな、白雪姫！

B:そんでええねん。そうして王子様と白雪姫は結ばれました。めでたし、めでたし。

A:よかったな。それでこのお話は終わりや。ハッピーエンド。

B:やがて二人の間に亀裂が入り、別れました。

A:続くんかいな。何でや。

B:小姑がいたでしょ。七人の小人。これがうるさい。

A:そっちな。

B:不倫はダメです。不倫は許さん。お姫様を裏切ったら、SNSで発散するぞーって毎日代わり番子に王子様の耳元で囁き続けるもんやから、王子様もいやんなっちゃった。それでお城も家来も全部白雪姫にやって、旅に出ました。

A:あっさりしてるんやね。

B:さあ、このあと、この物語は、王子様のお話になるのでしょうか。白雪姫のお話になるのでしょうか？

A:王子様の冒険譚かな、いや白雪姫の苦労話か。やっぱり、王子様や！

B:いいえ、この話はこれでおしまいです。

——王子様は自由気ままに放浪し、白雪姫は小人に囲まれて幸せにくらしたとき。

(ジャンジャン)

☆☆

その時代は後世になって“ストレス時代”と呼ばれた。それほどストレスがひどかった

のだ。社会が消滅しかかったほどのストレスとはどういうものだったのだろうか。

整形外科医 A：ああ、これはひどい肩凝りですね。

患者 P：原因は何ですか。

A：思い当たることはありますか。

P：ないです。

A：原因はストレスです。

内科医 B：胃がしくしく痛むんですか。

患者 P：そうなんです。何が悪かったんでしょうか。

B：ストレスです。

P：ときどき、胸が締め付けられるように苦しいんですが。

B：ストレスでしょう。

患者 P：物忘れがひどく、ふと自分がどこにいるかわからなくなります。朝ごはんを二度食べたり、風呂に二、三度入ったり、トイレでお尻を吹かないで出てきたりするんです。

認知症専門医師 C：典型的な認知症ですね。ストレスが進行を早めたのでしょうか。

P：先生、治るでしょうか。

C：薬や作業療法で軽くなりますよ。でもストレスの分は残るでしょうねえ。

ストレス科医師 D：全身性ストレス複合症候群ですね。なかなかやっかいな病気です。

患者 P：先生、何とかなるでしょうか。

D：なりません。

P：どうしてですか。

D：あなたの場合、社会真因性ですから、この社会がよくならなければ治りません。

1年が経過しました。

ストレス科医師 D：おや、久しぶりですね。あのあと、どうでした？

患者 P：病院に通わなくなったら、ストレスが消えてよくなりました。

D：治ったのに、なぜ当院に？

P：実は、まわりがストレス人間ばかりの職場で、一人だけストレスがないというのはおかしい、仕事に対する責任感がないのではないか、ノルマが軽すぎるのではないか、などと思われ、たくさんの仕事を与えられたのですが、どうせできもしないほどの仕事だから適当にやればいいさ、と思うので、ストレス度はゼロのまま上がらないのです。

ノルマをこなさないで給料は減るし、政府からのストレス手当ても打ち切られてしま

いました。生活がたち行かなくなったので、入院してストレスを溜めたいと思います。

☆☆

世界は極端な人口収縮期が続いていた。人口爆発が地球を破滅に導くと心配した時代はいつのころだっただろうか、今となっては懐かしく思い出される。近年は、年に1億人減というペースで人口が減り、街で子どもの姿を見ることはなくなった。

「このままでは私たちの社会がなくなってしまう」

「なぜ、子どもたちがいなくなったんだ」

専門家が答える。

「ストレスです。」

「出産世代のストレスが強すぎて、くたくたです。精子も元気がなくなっています」

「元気な奴はいないのか」

「元気があるのは政治家だけです。それと超ストレス社会を生き延びた80代でしょうか」

「じゃあ、政治家と年寄りの精子を使うか」

「何を馬鹿なことを。それじゃあ性事家になっちゃうじゃないですか。実は、一つだけ方法があります。社会からストレスをなくすのは無理です。そこで、私たちは、直接精子のストレスをなくす画期的な方法を考えました」

「それを早く言え。本当にできるのか」

「予算をつけていただければ」

「そんなまだるっこしいことをやってられるか。じゃぶじゃぶ使える国家危機対策機密費を回そう」

やがて、国家プロジェクトによって精子活力剤が完成した。コードネームは“タサン”。最初にできた薬は、各地の精子凍結保存センターに運び込まれた。やがて、塗り薬タサンパスや飲み薬ノムタサンが開発された。トナカイ印の注射液タサンタサンも出た。増産に増産を重ねた結果、ほとんどの若者に精子活力剤が行き渡った。

ヒトの発生は、卵子の受精に始まる。一度に約1億匹の精子が卵子を目指して鞭毛をくゆらして泳ぎ、たった1匹の精子が卵子と合体するのだ。精子活力剤で、ストレスバテのためレース途中で脱落していた精子が活気を取り戻した。卵子を目指して1億匹の精子が競う光景は圧巻で、群れをなして川をのぼるシラスウナギをはるかに凌駕していた。

「どうだ。タサン効果は？」

「まだ有意な結果が出てきません」

「どうしてだ！ どうしてなんだ」

「精子は元気になったんですが、卵子のストレスが残ったままです」

「それを片手落ちと言うんだよ。なぜ最初から両方やらないんだ」

「では、さっそく取りかかります」

精子は、男性がどんどん新しく作ることができるが、卵子はそうはいかない。女性は、生まれる時に卵子の元となる原始卵胞を卵巣に約 200 万個蓄えており、原始卵胞は減ることはあっても新しく作ることはできないのだ。出産できるようになるころには 2、30 万個になり、この細胞が卵子になって受精すれば妊娠→出産へと進むことになる。

「精子活力剤から卵子活力剤を作るのにどのくらいの費用と時間がかかるのかね」

「わかりません」

「なぜだ」

「原始卵胞は、ヒトと同じ年齢ですから、ご主人様である女性と同じストレスを蓄積しているのです。しかも、ご主人様は酒やショッピングでストレスを発散できても、原始卵胞は逆にそれがさらなるストレスになったりしますから、精子とは比較にならないほどストレス疲れしているのです。精子活力剤程度では治りません」

「それは深刻だ。陣容を拡大して、国家戦略として全力で取り組もう」

政府は、軍事費を大幅に削って研究開発費を調達した。幸か不幸か、子どもが減ったために使えなかった児童手当や出産補助費の分を回すこともできた。

今度のコードネームは“ダサン”と決まった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

B子：健康かどうかのバロメーターを教えましょ。あなたは寝付きがいいそうですね。

A介：はい。

B：そういう人は不健康です。

A：なんでや。健康やろ。

B：いえ。ところがそうでないんです。問題はストレスです。あなたは、昼間の苦しさから逃れようとして眠っていませんか？

A：そういえば、嫌なことを忘れたいと思うてます。

B：それでは何も解決していないのです。あなたの体のなかの 60 兆個の細胞の一つひとつに貯まったストレスを発散させなくてははいけません。

A：どうすんのや。

B：寝てください。

A：だから寝てますがな。

B：60 兆個の細胞が全部寝なければダメです。私がいい薬をあげます。あなたはリンゴを

食べるだけです。

A：どこかで聞いたような……。で、いつ起きんねん。

B：私がキスをしたときです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

かつての人口収縮期を脱して、世界は安定期を迎えていた。出産数の管理は世界連邦が統括するようになったので、地域格差も解消された。精子と卵子のストレスが解消されると人間のストレスも減少し、精活卵活社会推進法や三世同居助成法、いたわりあい共同体地域振興法、心痛用語使用禁止法などによって生活も安定したので、無ストレス社会が実現した。

すべてがうまくいっているようだった。

ただ、病院は患者であふれかえっていた。そのなかに通院仲間と世間話をしている患者Pの姿もあった。

「この頃、暮らし向きはどうかね」

「どうかねって。知ってる通り、世の中からストレスがなくなってからというもの、人間から意欲というものがなくなり、金持ちも偉人もいなくなっちゃった。世のため人のためっていう人までいなくなって、人の分まで食べるものや着るものを作る人もいない」

「店も市場もなくなり、サービス産業も消えたもんね」

「生きていかなくちゃならないから、自分が食べる分だけは自分で作ってるね」

「それでいいんじゃない。あのひどいストレスがなくなったんだから」

「食べたい、生きたいっていうのは何なんだろうね。人は死にたくないと思うみたいで病院だけは満杯だ」

「しかも、病院でさえ金銭欲がないから、診察料は食料品に限るだ」と

「おかげで俺は、病院に払う分まで野菜を作らなけりゃあならないから、生活は大変なんだよ」

「じゃあ、ストレスが貯まるね」

「全然」

「なんで？」

「タサンタサン中毒なんだよ」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

王子様は流れついた岬の村で気ままに暮らしていました。白雪姫も自給自足をしながらいつまでも小人たちと仲良く暮らしたということです。



☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「光陰矢のごとし」

「何ですか、それ？」

「時間が過ぎるのは速いもんだ。あっという間にもうこの歳だ」

「何歳です？」

「100歳じゃ」

「すごい！ 息してる」

「あたりまえじゃ。生きてるんだから」

「時間って速く過ぎるんですか」

「速いなあ。いつもはゆったりとしているが、気がつくともう1年が過ぎているのだ。何も変わっておらんのに、残された時間がどんどん少なくなる。あんたは何歳になるのかな」

「12です」

「若いのお。あんたには時間がたっぷり残っておる」

「私には1日が過ぎるのが遅いんです。学校に行って勉強して、遊んで、考えて、笑って、ケンカしても、まだ1日は終わりません」

「でも、不思議なんです。夢中になっていると、知らないうちに時間は過ぎますが、あとから考えると、その前にあった出来事はずっと昔のことに感じられます。とすると、その間の時間は長かったということになります」

「おお、そうか。わしも、日がな一日、ぼんやりしておると、1日が高いのか短いのかわからなくなる」

「時間の速さと長さは違うのかもしれないね」

「年寄りの時間と若者が持っている時間も違うのかもしらんな」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

老人は時間の速さや長さについて考えてみた。

時間を光のように「波」として考えてみよう。働き盛りの人が、エネルギーを振り絞って仕事をしているとき、その人にとって時間の波は、エネルギーの高い状態、すなわち短い波長で進んでいる。言い換えれば振動数（周波数）も大きい（注：この場合、原理的には時間波の速度を一定としているが、以降の議論では、人が“感じる”時間の速さは変わりうるという前提になっている）。

仕事をしている最中は、我を忘れて集中しており、時間を感じていないから時間は速いとも遅いとも言えないはずだが、気がついたときに時計を見ると時間は思ったよりも進んでいないので、「あっという間」「まだこんな時間？」すなわち「時間が経つのが遅い」と思うだろう。それは、びっしりと詰まった時間波の数を感じて「よくもこの短い時間内にやったもんだ」と思うことに相当する。いわば、このときに言う時間の速さとは、単位時

間に消費するエネルギー量と関連する。

この感覚は「時間が遅い＝時間が短い」ということになる。

しかし、人は体験を振り返るとき、直後とは異なる記憶処理を行う。すなわち、人は日常の中で時間波の波長をある一定の値に戻すのである。すると、同じ波の数が占める時間は伸びる。そのとき、「かかった時間は長い＝その前の記憶ははるか昔の出来事」という感覚が生じるのだ。

若者は動き回っているから、一般的に単位時間に消費するエネルギー量は多い。従って「時間は遅い（たくさん残っている）」「(使った)時間は短い」「体験は昔の出来事」と感じる。それは、未来の時間が広がっており、そこにも多くのエネルギーを投入しようという意思の現れでもある。

逆に、リタイアした高齢者の場合はこうだ。

年寄りの時間波の波長は長い。やることがないので「一日が長い」と感じるが、振り返ると以前もいまもほとんど同じ状態であり、その間に蓄積された波のエネルギーはすかすか。使った時間は長く、過ぎ去る時間は速いということになる。残りの時間はどんどん少なくなるだろう。

老人は「時間の浪費に気をつけないと」とつぶやいて空を見上げた。

☆☆

「重力波について、皆さんに分かりやすくご説明しましょう」――老理論物理学者は、町内会の勉強会でこう切り出した。

「みなさん、電気を知っていますか？」

「知ってま～す」――町内の皆さんが声を揃えた。

「みなさん、磁石を知ってますか？」

「知ってま～す」

「では、電磁波はどうでしょう」

「知りませ～ん」――町内の皆さんはどこまでも声がそろっていた。

「電磁波は、電気の波と磁力（磁石の力）の波が一体となったものです。円柱の物体を一方から見ると円に、他方から見ると長方形に見えますよね。電磁波を上から見ると電気の波、横から見ると磁石の波が見えると考えてください」

「は～い、わかりました」

「電磁波は、発電したり、モーターを動かしたりするときに活躍しているので、私たちに身近なものですが、私たちが感じるできないものに重力波というものがあります」

「初めて聞きました」「重力波って何ですか」「重力は知っているけど」――今度はばらばらの反応が返ってきた。

「重力波は、空間波と時間波が一体となったものです。上から見ると空間が、以降の横から見ると時間が見えると思ってください」

「わかんない」「そんなのあり?」「とりあえず試してみます」――これも反応はいろいろだった。

「電磁誘導という反応では、電界（電気の強弱の分布）が変化すると、その変化に抵抗する方向に磁界（磁力の強弱の分布）が生じます。時空の変動も同じように、空間の歪みが変わると時間の長さも変わるのです。その逆もあります」

「まったくわかりません」――今度は町内の皆さんの声が揃った。

それから老理論物理学者は、町内の皆さんに分かりやすく説明し始めた。それは、図や動画を駆使し、皆さんにわかってもらえたかどうかを確かめながらだったので、見事に全員が理解した。ただし、それを達成するのに、1年という時間がかかった。しかし、その時間は、理解した内容に比べればはるかに短かった。

しかしながら、ここでは紙数と表現技術の不足によりごく普通に記述することをお許しいただきたい。従って、これで理解できない人がいても責任はとらないので悪しからず。

現代では、空間は3次元、時間は1次元ですが、かつては（あるいは、宇宙のどこかでは）空間が8次元、時間が3次元だったかもしれません。しかしながら、当面、次元数は考えないことにしましょう。

宇宙の時空間を、重力波（時空波）の進行方向と波面を描くことで表現してみます。

まず、私たちの地球が起点になります。地球上ではほぼ経線緯線と同じように線が引かれますが、宇宙に飛び出すと、さまざまな形が出てきます。なかには、リンゴの上半分に網をかぶせたような絵が描かれます。

この場合、リンゴのどの部分が上になっているかは問題ではありません。どんな形状でも、立体的な平面に網がかぶっている状態を思い起こしていただければ十分です。

宇宙は絶えず変化しています。ですから宇宙の重力波（時空間）も常に揺れ動いています。その中で超新星爆発が起きれば、強い重力波が発生し、時空の変化が地球からも観測できるでしょう。

しかし、問題はこれからです。重力波は宇宙規模の大きさやブラックホールなどの重さを持つレベルでははっきりしますが、私たちの生活には何の影響もないように見えます。しかし、本当にそうでしょうか。

私は、同じ1日を「長かった」「短かった」、時間が「速かった」「遅かった」と異なる受け取りかたをすることに関係していると考えています。

私は、先ほど説明した世界の見方を「物理座標系」、人の感覚の世界を「心理座標系」とし、その間の相互作用によりそれを説明できるのではないかという仮説を提唱しています。その間を結ぶ“何か”については、あるかないかさえわかりません。仮にあるとして、私はそれを「ダークエネルギー」と名付けました。もしかしたら、かつて言われた「エーテル」と同じものかもしれません。

町内の皆さんには、わかりやすいように単純化して、物理座標系では時間波の速度を一定とし、心理座標系では時間波を“時間子”というエネルギー一定の粒子として話しました。といっても、それでわかっていただいたわけではありません。実は、次のような喩え話にしたのです。

「人間には二人の背後霊が付いていると言われています。一人は時間泥棒、もう一人は空間泥棒なのです。その世界が物理座標系、そしてあなたの感覚（脳）は心理座標系です。あなたの脳は、時間を盗まれると空間で埋めようとし、空間を盗まれると時間を取り戻そうとします。では、その間を取り持つもの（伝達因子）は何でしょう。これが、皆さんに考えていただく私からのクイズ問題です」

残念ながら、町内の皆さんにした説明をここで詳しく紹介することはできません。この話が、ショートストーリー（小話）ではなくロングストーリー（小説）になってしまうからです。

ただし、町内の皆さんに出したクイズにはあなたも、答えていただきたい。いつまでも回答をお待ちしております。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

【クイズ3】バスを降りてから電車に乗るまでの間にあるビルの壁に時刻板が掲示されています。そこには「07:29:40」とありました。

太郎くんは、このとき走るべきでしょうか、めざす電車に乗るのを諦めるべきでしょうか。物理座標系と心理座標系に分けて論じ、統一した答えを導け。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「もしかしたら、物理的時空と心理的時空を満たす“物心波”が、我々が最後に到達すべき、たった一つの真理かもしれない。そうすると、超大統一理論が完成し、神が我々の世界に降りてくるだろう」

老理論物理学者は言葉に力を込めて叫んだ。だが、彼には時間が残されていなかった。

やがて、彼の思考は無数の粒子となって宇宙に飛散し、ダークエネルギーに飲み込まれて行った。

## グレートジャーニー後予測のための局地的観察録抜粋 「人は何処を目指すのか」

「さあ、行くぞ」

「チャン、いつもより遠くまで来てるよ。どこまで行くの？」

「行くも帰るもない。食べるものがあるところが俺たちの居場所なんだよ。獲物を求めて行くだけだ」

「でも目の前は砂漠だけ。獲物はいないよ」

「ここを越えるんだ。その先はパラダイスだ。“希望”を持って！」

「希望？ 希望って何。初めてだよ、そういうこと聞いたのは」

「そういえば、俺も初めて口にした。希望とはなんだろう。もやもやとしているが、なんかほろ苦くて、やさしい感じもして、大木の下にいるようでもあり、青空が広がっていて、そよ風が心に吹いてくる。そのくせやたら強くて揺るがない。大雨も大風もみんな乗り越えられるような気がする。たぶん、俺たちの心を支えてくれているんだろう」

「“心”って？」

「おお、それもいま初めて出てきた。次々に“何か”が湧いてくるんだ」

「よくわからないけど、新しい“言葉”を聞くと、よし行こう、って気持ちになるよ」

「おお、それだ！ これは言葉なんだ。天が俺たちにくれた宝物。それが言葉だ。俺たちの魂なんだ」

「魂、心、希望……。言葉……」

「じゃあ、俺は何だ。俺たちは何だ。そうだ。俺は“ヒト”だ、俺たちは“人間”だ。これから俺たちは自分たちのことを“人間”と呼ぼう」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

芝居はまだ続いていた。老人はそこで席を立った。そして、つぶやいた。

「なぜ人は地球上にはびこっているのか」

何日か前に孫が言った。

「おじいちゃん、どうしてカンガルーはオーストラリアにしかいないのに、人間は地球上のどこにでもいるの？」

「そうだね。どうしてなんだろうね」

「おじいちゃん、教えてよ。だって、おじいちゃんは物知りなんですよ」

「う～ん。それはこの次ね……」

[……。そう言えば『グレートジャーニー』っていう芝居がかかっているそうだ。それを

観てみるか……]

第1幕の『希望』が終わり、第2幕『欲望』が始まったところで、男は席に戻った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「さあ、行くぞ」

「チャン、どこへ行くの？」

「北だ」

「どうして北へ行くの？」

「ここは食べ物が少ない。争いも増えた。だが、北へ行けば獲物も多い」

「どうしてわかるの？」

「かつて、ここで争いに負けた人間が北へ向かった。だが、死んだやつも多いらしい。途中で諦めて帰ってきた人間も多かった。だが、いつしか帰って来る人間がいなくなった。ということは、生きられる土地を見つけたということだ。俺にはわかる」

「じゃあ、北ではお腹いっぱいお肉を食べられるね」

「そうだ。だが、それには仲間を作らなければならぬ。バラバラだと殺される。それはここでも北でも同じことだろう」

「じゃあ、エレクトゥスにもネアンデルタールの人にも声をかけてくるよ」

「待て、あの毛深い連中は人間じゃあない。自分たちは人間だと言っているが、人間って何かわかっているわけではない。わずかな食糧を奪い合っている愚かな動物だ」

「でも仲間で集まってるし、力も強いよ」

「そうだ、最初に火を使ったのもあいつらだし、研いだ石で狩りもする。だが、それだけだ。喧嘩するだけの言葉も持ち合わせていない。だから集団でいられるとも言える。しゃくだが、俺たちは戦えば負ける。北だ。北へ行けば俺たちの世界が待ってるんだ」

「いっぱいお肉が食べられるんだね」

「俺たちも、肉をたくさん食べたい仲間を多く集めてグループを作るんだ。自分たちを守るためだ。そうだ、それを“民族”と呼ぼう」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

老人はすでに知っていた。動物のヒトは、700 万年前にサルの祖先から別れたことを。そして、そこはアフリカであったろう。

老人は知っていた。現代のヒトは、ホモサピエンスという種であることを。

猿人、旧人、新人と枝分かかれし、火や言語を操るようになり、ホモサピエンスとして進化と拡大を続け、数十万年前から何回となく移住の波を繰返し、数万年前には全ヨーロッパに広がり、やがてベーリング海峡を越えてアメリカ大陸へ、東アジアから海へ乗り出して太平洋の島々へ、と移って、ついに地球上をホモサピエンスがはびこる星にしたことを。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「さあ、行くぞ」

「チャン、どこへ行くの？」

「さあ、わからん。だが、いい予感がするのだ。我々は考える力を得た。想像することもできる。想定外のことで、その場の判断で困難を乗り越えることができるようになったのだ。恐れることはない。まずは、北に向かって出発だ」

「どうして北なの？」

「わからん。なぜかそう思うのだ。北にはきっと食べものがたくさんある。獣も多いはずだ」

「どうしてわかるの？」

「わからん。だが、ここでは食べ物や水を奪い合って争いが増えた。同じ人間なのに民族が違うといがみあっている。だが、我が民族は考える力を持った。その力が指し示しているのだ、北へ行け、と。」

「北へ行けばどうなるの？」

「殺し合いをしなくても平和に生きる社会を作るんだ。ここでは、人間だけが増え、他の生き物がどうなるうとかまわなかったが、北では、生きとし生きるものすべてを慈しみ、すべての生き物が分相応に生きようにする。わしの考える力はそう言っている」

「そう言えば、かつて北へ向かった民族がいた。あの人たちはいい人たちだった。争いを好まず、ものを分け合い、助け合って生きていた。力の強い民族に負けて北へ行ったが、今でも同じ生活をしているはずだ」

「一緒に暮らせるの？」

「あの人たちは、よそ者を受け入れてくれる。たとえ自分たちの食べるものが少なくても分けあう“精神”を持っている」

「精神ってなあに？ 初めて聞いたよ」

「おお、そうか。言葉が降りてきたんだ。その精神が我々を呼んでいるのかもしれない。我々は前に進むんだ。未知に向かって進む心—それを“勇気”と呼ぼう。考える力に加えて決断する力を我々は身につけたのだ。みんなが一つの心でつながるんだ」

「精神、勇気、決断。そして心と心をつなぐんだね。なんか、目の前が明るくなってきたぞ。さあ、北へ行こう」

「よし、そうしよう。我々は、着物という、寒さを防ぐものも発明したし、火を自由に操る技も磨いた。北の人たちも喜んで迎え入れてくれるはずだ」

「夜が明ける前に出発しよう」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

第3幕『願望』は、人間が次々に理想を獲得するシーンが続いた。そして、老人は知っ

ていた。それが理想と現実の狭間で揺れる人間の葛藤の始まりであることを。

人類が地球上を多い尽くすように増えたのは、人類だけに与えられた特権なのか。あるいは、いずれはどこかで行き詰まってしまうのか。老人は、増えすぎたネズミが群れのまま湖に入っていく光景を思い浮かべた。

「ネズミは悲しみを知らないから、また同じように生きていける…」

老人はなにやらつぶやき始めたが、傍らの孫に語りかけることはしなかった。

芝居は最終章の第4幕『絶望』に移った。

☆☆

どこまでも続く草原が広がっていた。そこでウサギが飛び上がり、落ちるまもなく消えた。それは空気のカーテンをくぐり抜けたようにも見え、CGのようにフェーズアウトしたようにも見えた。遠くでもウサギが飛び跳ね、空中に消えた。あちらこちらでウサギがポッと現れ、フッと消えた。

そこには何もなかった。いや、何もなかったのではない。草は、瓦礫の山を覆ってはびこっていた。瓦礫のいくつかは土器だった。銅鐸も見えた。ジュラルミンの板が草の根を持ち上げてもいた。その下には厚さ10m、幅20m、長さ100kmのコンクリートが横たわっていた。それはいつの日か陸と海を隔てていた“防潮堤”というものであったろう。その下には庖丁も、鍋も釜も、洗濯機もロボット掃除機も埋まっていた。セルロイドのキューピットは裸でキューっと哭いたままの形を続けていた。その横には錆びた無数の銃剣が巨大な塊となって眠っていた。

それらのいくつかは、大きな円柱形のコンクリート釜に乗っていた。釜の下は抜け落ち、カプセル型の容器を半分抱え込んでいた。その周りには赤や青色に塗られた大きなパイプが絡んだりくっついたり、ゆがんだりしながら四方八方に向かってつながっていた。ドーナツ型に閉じられた容器の一部には爆発で開いた穴があった。その下は地下水で満たされており、溶けたハンダのかたまりに似た不定形の“ある物質”があった。その中心部分は不気味にオレンジ色に輝いており、いまにもマグマのように突沸する準備をしていた。

地上も地下も静寂そのものであった。

地上では相変わらず、ウサギが飛び跳ねては消えた。

その、ウサギと見えたのはかつて“タマシイ”と呼ばれていたものであったろう。

☆☆

舞台は、色とりどりのライトが微妙に点滅することによって、殺伐ともなり、また華やかにもなった。

スクリーンには埋もれた瓦礫が次から次へと映し出された。

やがて、スクリーンが暗くなり、第4幕が終わった。スクリーンの前にスポットライトが当たり、草に体の半分を埋め、膝を抱えて座り込んでいる老人と子供が浮かび上がった。

老人はやおら立ち上がり、孫の手を引いて下手に向かった。「希望はどこに行っちゃったんだ…」――そうつぶやいているようだった。そして消えた。

そのとき、観客席を取り巻いていたテントがまくり上がり、一陣の風が吹き込んだ。風がやんだとき、観客は一人もいなかった。

## 「疫学的生活因果律による政治風日常絵巻図（部分）」

「行ってくるよ」

竜馬は靴ひもを結び終わるとそう言って立ち上がった。

「行ってらっしゃい」

妻はいつものようにさりりと送り出す言葉を口にした。そしてすかさず

「これ、ゴミ」

と言って白いビニール袋を突き出した。

「ハイッ」

竜馬は反射的に答え、人差指にゴミ袋の結び目を引っかけてドアのノブを回した。

その朝は雨が降っていた。

（まったく！バスはどうして来ないんだろう。雨の日はいつもこうだ。ダイヤは3分か5分おきに来るようになっているのに今日はもう10分は待たされている。道が混んで遅れたとしても次々にバスは出ているのだから30分遅れのバスが目の前にいてもいいはずだ。通勤時間が終わって混雑が解消されると遅れたバスが連なって走るのだろうか。いや、それとも間引き運転となり、バス会社は効率のよい運行にほくそ笑むのだろうか。いやいや、バス路線には国や県が補助金を出していて、しかもダイヤや運賃も運輸省の認可事項になっているはずだからそんなことはするまい。客が一人もいなくても子供の電車ごっこのようにつながってバスは走るのだ。）

やっと5、6軒先の家の影にバスが見え、竜馬はほっとした。これで職場には20分ほどの遅れですむだろう。緊張がほぐれた瞬間、彼の左手の人差指の先で何かがかすかに揺れた。いつものカバンは小脇に抱えている。一体、この重さはなんだろう。考えようとしたその瞬間、「アッ」という声が竜馬の口から漏れた。

あー、やられた。ゴミ袋だ。

このままバスに乗って行って駅のごみ箱に捨てようか。だが、朝のラッシュのなかでこのゴミ袋を押し込む余裕があるだろうか。ウーム……。

竜馬は意を決して我家への道を歩き始めた。

これじゃ、だいぶ遅くなってしまおうぞ。……マッ、いいか。どうせ雨の日は遅れるんだ。ゴミ袋をぶら下げながらバス停で突っ立っている自分の姿を思い出しながら竜馬はウフッと三遊亭円生のように含み笑いをした。

うつむきながらウフッ、ウフッと手で口を抑える竜馬の横を近くに住むサラリーマンがバス停に向かって急ぎ足で通り抜けた。

☆☆

「ソーリ、ソーリはゴミ出しをしたことがおありでしょうか」

「委員長」

「はい、環境大臣」

「首相公邸にはゴミ出しという概念は存在しません。一般のゴミ収集システムとは違います」

「環境大臣に聞いているのではありません。ソーリご自身に答えていただきたい。ソーリはゴミ出しをしたことがありますか」

「委員長」

「国家公安委員長」

「官邸や公邸の中でどのようなシステムが動いているかにつきましては、最高レベルの国家機密に当たるため情報公開はできません」

「私はソーリに聞いているんです。ソーリがゴミ出しをすることについて奥さまはどうおっしゃっていますか」

「委員長」

「官房長官」

「家庭内のことについてはプライバシー侵害に当たる恐れがございます」

「あなたは女房気取りしていればいいってもんじゃないでしょ。私はソーリに聞いてるんです」

「委員長」

「はい、官房長官」

「私が女房役と言われていることについては答弁可能です。そもそも、官房長官たるものは……」

「ソーリ、ソーリ、ソーリ。私はソーリに聞いてるんです。ソーリ、ソーリ、ソーリ、教えてください。ソーリ、ソーリ、ソーリ、ソーリ、ソーリ、奥さんを参考人として呼びますよ。いいんですか」

「委員長」

「総理大臣」

「そう興奮しないでください。だいたい、妻を呼ぶなんて何てことを言い出すんですか。あんただって私の家庭の事情を知ってるでしょ。意地が悪いよ。大体、質問が悪い。人の家庭のことを聞くときには自分のことを先に言いなさい。あんたの旦那はゴミ出してんの？」

「私は独身です」

「早く結婚しなさいよ。そもそもあんたの党はずるいよ。独身の女性に私の家庭の事情を聞かせるなんて」

「ソーリのゴミ問題について国民の関心を見做す態度は許せません。関連して引き続き原発のゴミ問題について質問します」

「委員に申し上げます。すでに質問時間は過ぎております。直ちに質問を終えてください」

後日、情報公開法に基づいた請求を行った市民に対して首相官邸から資料が届いた。1枚の新聞記事のコピーだった。そこには「首相日々」として次のように書かれていた。

「5月2日（月）6時00分、ゴミ出し」

☆☆

（煙害日記その1）

井の頭線の駅ホームのベンチに座っているとき、斜め後ろの方から風が吹いてきたかと思うと太股の一点が急に熱くなり、「アチッ」と小さい声を上げてしまった。風とともに灰が飛び散り、とっさに足の上に落ちた灰を払い落とした。

学生がホームの吸いながら入れにタバコの灰を落とそうとしたらしく、こちらが事情を把握する前に「ごめんなさい」と言われてしまった。怒るタイミングを逸してしまったこともあるが、青少年をあたたかく見守ろうと私は、何か言いたくなる気持ちをグッと押さえて、微笑んだ。

馬鹿野郎！ この野郎！ 駅のホームなんかでタバコを吸うなってんだ!! ギグシヨ。ズボンに穴があかなくてよかったナー。

（煙害日記その2）

高田馬場駅のホームに降り立った途端、目の前を老人が走った。彼は手に持っていたタバコの火を消しもせず、ホームに投げ捨てて列車に走り込んだのだった。

ホームでくすぶったままのタバコを見てなんだか怒りがこみ上げてきた。が、老人福祉と老後の問題を深く考える小生としてはその怒りをグッと押し殺したのであった。しかし、しかし、である。

馬鹿野郎！ この野郎！ 列車に飛び乗るんだったら走りながらタバコを吸うなってんだ!!

(煙害日記まとめ)

本当にタバコには腹が立つ。火のついたタバコを手にはぶらぶらさせながら歩くな！ なんで、タバコが嫌いなオレがすれ違う度によけて歩かなければならないんだ。どっちが気を使わなければならないか、よ〜く考える！

本当にこの国の喫煙者はマナーが悪い。いや、500年前のコロンブスが悪い。いやいや、吸っていたアメリカ先住民が悪い。いやいやそもそもタバコが悪い。いやいやいや、植物の存在そのものは悪くないんだからやっぱり栽培した人間が悪い。いやいやいや…  
…。ええーい、こうなりゃタバコ会社が悪い!! 税金取っている国が悪い。とにかく、責任者、出てこい!

【いずれも、はるか昔の出来事である。今では愛煙家は肩身の狭い思いで過ごしているという。タバコの奴隷になっている愛煙家に愛情と憐れみを覚えつつも、タバコがなくなる日が早く来ることをただひたすら祈る。】

☆☆

「ソーリ、たばこ税による収入と喫煙による健康被害は、どちらが国家財政にとって大きいと思いますか」

「は？ 何ですか」

「税金として国に入る金額とタバコを吸って病気になるために国が負担する保険料額は、どちらが大きいと思いますか」

「国にとって税金は入ってくるお金だし、保険料負担は出ていくお金だから比較なんかできんだろう」

「タバコを吸わない人が増えて病気になる人が減ると医療費支出が減るので国庫が助かるのです。健康増進法で禁煙活動を義務づけていますが、罰則がありません。強化すべきではありませんか」

「タバコを吸わない人が減ると国の収入が減る。タバコ農家も困るのでバランスを考えながら進めたい」

「タバコの値段を2倍以上にし、禁煙活動を強化すれば医療費は減ります。たばこ税の減収は取り戻せるのです」

「収入が減り、支出も減るということは財政規模が縮小することです。経済はお金を回さなければ疲弊してしまう。景気も悪くなり、国民の生活も苦しくなるのです。ここは必要のない事業でもやるべきです。第一、財政を担っている者として旨味が出ませんよ」

「既得権を守り、利権に執着するソーリらしい答弁です。でもね、タバコによる健康被害は放射線被曝よりも大きく、証拠もはっきりしているという専門家もいるくらいなんですよ」

「ほうら、ご覧なさい。放射線はそのくらい安全なんですよ」

国会が終わってソーリはすぐに指示を出した。原子力発電所の掲示板には、新しく次のような通知が加えられた。

「放射線を浴びてもタバコほどはガンにならないことがわかったため、タバコを吸う廃炉担当労働者の許容被曝線量（上限値）を10倍に引き上げます」

☆☆

だんごむしは丸まっていた。ポーンと投げ出された感覚のあと、しばらく丸まっていた。まわりは落ち葉で埋まっていた。やがて、だんごむしはごちそうに気がつき、ひたすら食べ始めた。不思議なことに競争相手は一人もいなかった。

また、ポーンという感覚がしてだんごむしは丸まった。すぐに静まったあと、バサッ、バサッと何かが重なる圧力を感じたが、だんごむしはすぐに背伸びしたあと落ち葉を食み続けた。

次に感じたのはガサガサッという音がして宇宙全体が震動するほどのめまいのあと、押しつぶされるような危険な空気だった。周りの落ち葉もろとも押し潰されそうで、かろうじて滑り込んだ隙間で周りの落ち葉を食べ、自らの体を落ち着かせる空間を作り出した。

だんごむしはしばらく小さな震動を感じながらより小さく丸まっていた。食べ物はいっぱいあったが、だんごむしはそれを食べることはなかった。

だんごむしは丸まったまま灼熱地獄に落ちた。だが、だんごむしは罪を犯したわけではなかった。ただ、人間社会のゴミ処理システムに巻き込まれただけだった。

罪深きは、だんごむしをつまんでゴミ袋に放り込んだ私であつたらう。

☆☆

「ソーリ、ソーリはゴミ出しをしているではないですか。新聞にはっきり書いてあります」

「委員長」

「はい、厚生労働大臣」

「ソーリがゴミを出した事実があったかどうか回答を控えさせていただきます」

「実際に書いてあるじゃないですか」

「書いてあることが真実であるかどうかも含めてノーコメントとさせていただきます」

「ソーリ、これは大きな問題なんですよ。環境問題、エネルギー問題、性差別問題、動物愛護問題につながる国家的かつ国際的なテーマなんです。ソーリご自身が国民に対してお答えいただきたい。それが民主主義であり、国民主権というものです」

「委員長」

「はい、外務大臣」

「それでは申し上げます。かつて、領土の返還交渉の中で相手国との間に密約があったという問題をご存じでしょうか。我が国は相手国の公文書が出て、また我が国の元外交官が秘密を暴露しても、さらに裁判で事実認定がなされても、密約問題そのものが存在しないものとして一切コメントしておりません。それが国益に沿ったものであり、国体護持というものなのです。

国民主権というものは公共の福祉、すなわち公共の秩序を維持する範囲内で許されたものであり、総理には黙秘権という基本的な権利があります。ゴミ出しの事実があったかどうか、なんて密約問題と比べれば小さなものです。しかし、ソーリの家庭という公的空間における秩序維持のためにはお答えできない場合もあるのです。よって、政府見解としてはソーリのゴミ出し問題は存在さえしていないということです」

「ソーリ、外務大臣はああ言っていますが、ソーリとしても同じ考えかどうか、お答えください」

「委員長」

「内閣総理大臣」

「まずは、家庭は国家の基本組織であり、家庭がしっかりしないと国家も危ういということをご理解いただきたい。その上で申し上げますが、個人の家庭で由緒正しい家系と深刻な嫁姑問題によって重い病気を患っている家長たる人間が余人をもって代えがたい国家の要職を担っているとき、公職中に多少の休養をとることがあっても国益のためにはあつてしかるべきと考えております。よって、応援ヤジは除きますが、委員会質疑において安眠妨害になる大声は人権侵害になる可能性があることを申し添えさせていただきます」

「そうだったのか」――テレビの前で国民は一斉に膝を叩いた。国民はやっとわかったのだ。ソーリが病気になった原因と、答弁拒否を続けたり、途中で長時間抜け出す理由が。

ただ、そのことによって内閣支持率が急上昇するとは、国民の誰一人として予想だにできなかった。

☆☆

その日は電車は混みに混んでいた。私は乗換駅で私鉄から地下鉄の階段を走り下りてホームに達した。やがて入ってきた電車も混んでいた。私は、足とカバンをホームに残しながら体を乗客に無理に押し付け、続いて扉が閉まると同時に足とカバンを瞬時に車内に引き入れた。華麗な職人技で見事に乗り込んだとふっと力を抜いた途端、再び扉が開いた。

扉に押し付けられていた私の体は見事にホームに投げ出され、一瞬にしてホームに横倒しになった。何があったのか、しばらくわからなかった。ただ、そのときに見えた光景は新鮮だった。「この光景もいいな」――そう思ってそのままの姿勢でじっと見ていた。

座った姿勢のままの乞食は、低い視線で世間を見ている。それは我々が見ている世界とはまったく異なる次元の宇宙だ。横倒しになって初めて見えたこの世界も同じようなものだった。

林家正蔵（彦六）師匠は、二度続けて転んだとき起きあがることをせず、「また転ぶならさっき起きなければよかった」とつぶやいたという。私は「彦六師匠はすごい人だ」と思いながら、ホームに横たわっていた。

駆け寄る人の足音や叫び声はリズム感もなく、遠く頭上を駆け抜ける雲のようであった。

[第1巻の終わり]